

病院にかからない在日南米人？

—在日南米人の医療保障に関する研究—

M083030 山本 かおり

1. 研究背景

近年、日本の地域社会で生活する外国籍住民の数は増加を続け、筆者の勤務する病院においても特に南米出身の外国人患者の増加が目立つようになった。外国人患者の増加に伴い「異なる文化」を背景とした患者への支援の視点が必要とされるようになってきている。

「デカセギ」目的で来日した在日南米人の「定住化」により、教育や社会保障問題などが顕在化しており、とりまく環境や体制に様々な課題があると考えられる。

2. 在日南米人の定義

南米で生まれ育ち、労働を目的として来日している日系人と日系人の配偶者や子を対象とし、本論文では「在日南米人」と包括的に定義することとする。

3. 問題意識

在日南米人はわが国の活動に制限のない在留資格を有し、健康保険にも加入できるが、無保険状態で、必要な時に適切な治療が受けられず病気が重症化しているという者がいた。また、健康であっても将来について描けない状況で、日本の社会保障が自分たちにとって必要なものとは思えない無保険状態の者もいた。

それでは在日南米人は経済的な余裕があれば健康保険に加入し、軽症のうちに病院に行き治療を受け、病状によっては定期的に受診をするなどの「適切な受診行動」が可能になるのであろうか。また、健康保険への加入を強制させることができるだろうか。

4. 研究目的

在日南米人の医療問題は「デカセギ」のための来日であることから、病気などの生活者としてのリスクに備えることの優先順位が低いことが、理由の一つであると考えられる。これは、置かれた立場や人生観により、健康保険や言葉の壁への対処に違いが表れ「適切な受診行動」ができるかどうかが決ってくると考える。

そこで、本論文では在日南米人が病気という身体的リスクや、日本の医療保障または健康保険をいかに捉え対処しているかを明らかにし、彼らにとってより良い医療や医療保障のあり方について考察することを目的とする。その上で地域社会はどのように捉え、包摂していくのかを考察することが必要であると考えられる。

5. 在日南米人へのインタビュー調査の結果と考察

先行研究のレビューより、「医療保障制度の利用」

「コミュニケーション」「文化的な問題」の視点から在日南米人がとる「適切な受診行動」について考察する。

5-1 医療保障制度の利用

健康保険の仕組み上、制度に加入しにくいこと、加入していても保険料が高額になり、滞納せざるを得ない状況になっている者がいることが分かった。また、健康保険の必要性を理解しながら加入していない者は、最終的には生活保護を受給するか、帰国するといった選択肢を持っていた。彼らの置かれた立場を理解し、仕組みを整備する必要があるのではないかと考える。

5-2 コミュニケーションに関する問題

特に、精神科の受診におけるコミュニケーションの問題を指摘する者もあり、深刻な問題として検討をする必要があると言えよう。受診をする際に日本語が理解できない者にとっては、医療通訳は必要不可欠の存在である。しかし、現実問題としては整備していくことは人材不足や予算の問題などから難しいことが考えられる。特に精神科の場合は医療通訳の技術力の高さが問われる。

5-3 文化的な問題

本調査ではいつの間にか滞日が長期化し「いつかは帰国したい」と考える者と、日本で永住することを決心している者がいた。在日南米人が日本の文化を理解し、日本での生活に支障がないとしても、流動的な人生観を持つ者にとっては、日本の制度は受け入れにくい仕組みとなっている。つまり、単に文化的な問題として扱うのではなく「帰属意識の流動性」を持つ在日南米人の問題として扱う必要があると考える。

6. 研究の意義と課題

これまでの在日南米人の医療・福祉問題にかかわる研究は「制度問題」「コミュニケーション」「文化的な問題」のそれぞれの問題点について各論の研究であった。本論文では、在日南米人が考える病気の治療に関しての考え方や対処の方法を質的調査により取り上げることで、問題の本質を追究することができたと考えられる。これまで論じられることのなかった「帰属意識の流動性」に着目し、医療保障問題について考察できたことは有意義であったと考える。今後は、流動性を持ちながら現在の生活と将来の展望の中で葛藤する在日南米人を、いかに地域社会で包摂していくのかという課題を、検討する必要があるであろう。